

あるむぜお102

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 102

2012年12月20日



四谷文化センター脇で行われたどんど焼き【2012年（平成24）1月15日午前8時】

目次

1-2 年中行事の現在 in 府中

③どんど焼き

3 展示会案内

特別展 江戸時代の多摩を掘る

4-5 ノート カラスは都会の里山動物

6 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物

⑦猿渡盛章

7 最近の発掘調査

古墳を見ながら発掘体験

8 町にまつわる雑学講座 府中町 緑町

年中行事の現在 in 府中

お正月から大晦日まで、日本にはさまざまな年中行事があります。平安時代より続くものもあれば、節分の恵方巻きのようになって広く行われるようになったものもあります。そのなかでもふるくから伝承されている府中市域の年中行事の現在について紹介します。

③どんど焼き

一般には正月飾りを焼く小正月（1月15日）の行事として知られています。日本各地に目を向けると「とんど」「どんどん焼き」「左義長」などと呼ぶ地域もあります。多摩地域では、道の神とされる道祖神のまつりと融合し、道祖神の別称「サイノカミ」「セエノカミ」とも呼ばれています。

府中周辺では正月飾りを焼き、あわせて道の神である道祖神（サイノカミ）にその火を奉納する行事でした。現在でも御神体とされる石を火に投げたり、火の近くに石を安置しお神酒や団子を奉納する地区があります。

府中を訪れた江戸時代の文化人・大田蜀山人の『調布日記』内に興味深い記述があります。文化6年（1809）正月2日、彼が府中の町から四谷（現 府中市四谷）に向かう途中「道に穴をほりし所あり、これは十四の夜の松かざりをとりて、焼いてさいの神を祭るなり」というものです。現在と実施内容は若干異なるようですが、少なくとも府中市域の「サイノカミ」は江戸時代後期までさかのぼるといえるでしょう。

大正～昭和初期頃は子供たちが家々を巡り、正月飾りとともに竹、ワラを集めました。それを材料にして広場に円錐形の小屋を建ててその中で過ごし、最後に燃やしました。多摩川沿いでは対岸も含め多くの地区との競演が見渡せたといえます。

しかし戦後徐々に行われなくなり、1955年頃か



現在の小柳町で1935年頃につくられたサイノカミの小屋。周囲に住宅は少なく、水田が広がっていた。

ら実施が禁止となりました。子供主催で資金や材料を集め、夜通し小屋で過ごすことが風紀上よくないとされたためです。禁止になっても細々と続けていた地区もありましたが、1960年を最後に市内全てで一時的姿を消しました。その後1970年代に入り一部が大人を主体とした行事として復活しました。文化センターの年間行事となった地区もあり、その後徐々に一般的な呼び名の「どんど焼き」という行事名も使用されるようになりました。

復活したとはいえ、宅地化の影響で実施場所は限られ、行事の継続は創意工夫を必要とします。実施する日は正月15日から、人々が集まりやすい15日近辺の土・日・祝日が多くなりました。近隣の配慮も必要です。どんど焼きは、いわば大がかりな野焼きのため、短時間ではありますが高く煙が出ます。行事をよく知らない人から火災と間違われ、通報されることもあるようです。そのため設営から燃やす当日まで、防火体制を整えることが必要となり、現在では夜間に警備員を配置している地区もあります。また、近年は正月飾りについてはプラスチックや金属などを燃やすことによる環境汚染が指摘されています。そのため、正月かざりの受付自体をとりやめたり、受け付ける日を制限し分別作業をすることで、なんとか行事を継続しようとしている地区もあります。

さらに、2011年3月発生した東日本大震災に伴う原発事故の影響により、燃やすものに放射性物質が付着している可能性を指摘されるといった問題が起きました。そのため2012年には大規模などんど焼きを自粛した地区もありました。逆に「伝統を途切れさせるわけにはいかない」と検査を行い、安全確認のうえ実施することで行事続行を決めた地区もありました。いずれにせよ伝統行事も環境に配慮する必要が出てきているのです。

2012年1月時点で実施したどんど焼きは形式的なものも含め、押立、車返（白糸台）、四谷、人見（若松町）など数か所しかありません。それぞれが伝承と現状を吟味し、行事を継続している点に敬意を表したいと思います。（佐藤智敬）

展示会案内

特別展

2013 / 1 / 26 日 → 3 / 10 日

時代劇でおなじみの江戸時代。原始や古代ほど遠い昔ではないので、古文書や記録も数多く残っていて、〈発掘から語れることなんてたかが知れてる〉と思われるかもしれませんが。

しかし、古文書や記録ではわからないことも少なくありません。何より、古文書や記録は残そうとして伝えられてきたものであるのに対して、遺跡や遺物のほとんどは当時の人びとが残そうとしたものではありません。いわば、意識せずして残ったものといつてよいでしょう。こうした性格を持つ遺跡や遺物が、古文書や記録とは違った歴史像を描きだしてくれるのです。

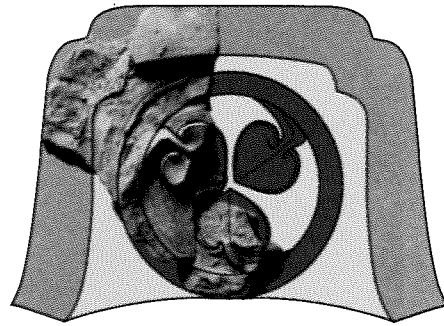
府中市では、古代武蔵国府の考古学解明を最大のテーマに掲げて、遺跡の発掘調査に積極的に取り組んできました。古代国府の遺跡の中心部は江戸時代の宿場である府中宿と重複しているので、必然的に江戸時代の遺跡の発掘調査も数多く行ってきました。2010年にはJR府中本町駅の隣接地で、徳川家康が造営したと伝えられる御殿の跡が発見されています。

江戸時代の遺跡の発掘は府中に限ったことではなく、各地で取り組まれています。今回の展示会では、現段階における多摩地域の江戸時代の遺跡を総覧します。宿場や一里塚、旗本の陣屋跡や新田開発村の屋敷、梵鐘の鑄造や陶器の生産など。世界でも有数の規模を誇る大都市・江戸、その近郊という多摩地域での人びとの営みを紹介でき



中国から輸入された薬瓶 高さ3.7cmだから、実際は写真よりも小さい。さぞかし高価で珍重された薬なのだろう。どんな病に効いたのであろうか。

江戸時代の 多摩を掘る



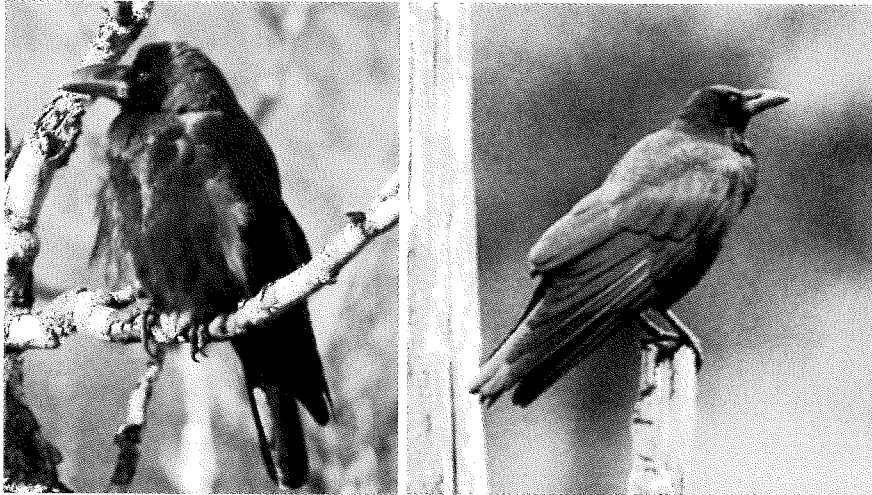
三つ葉葵文の鬼瓦 府中御殿跡出土。
徳川氏の御殿であることを証明する出土品。

ばと思います。

展示する出土品のなかから、小さくて地味だけど、興味を引くモノを一つ紹介しておきましょう。片面に「乍浦鎮」、もう片面に「宏濟堂」の文字を染付けた、高さ3.7cmの磁器製の瓶です。上海に近い港町の乍浦鎮にある宏濟堂の商品で、中身は薬だったようです。

よく知られているように、江戸時代は鎖国の時代。外国との往来は著しく制限され、長崎などを窓口で輸入されていたにすぎません。中国製の薬はその一つです。同様の薬瓶は長崎や江戸の遺跡で出土しているものの、それ以外ではほとんど知られていません。中国製の薬はとても高価で、その流通は限定されていたのです。残念ながらその効用は明らかではありませんが、こうした舶来の薬が府中宿にもたらされているのです。大都市江戸近郊の宿場町だからこその出土品といつてよいでしょう。また、鎖国のなかでも、外国の商品が意外と出回っている、と考えることもできます。場所の性格と時代相を映す出土品なのです。

展示会では、ほかにもたくさんの遺跡と出土品を紹介します。遺跡と出土品が語る江戸時代に耳を傾けていただければ幸いです。(深澤靖幸)



ハシブトガラス(左) とハシボソガラス(右)

今年の夏休みに開催した特別展「里山どうぶつ探検」では、東京に生息する里山動物が、山間部以外の都市化されたエリアにも豊富に入り込んでいることを考察しました。タヌキやイノシシといった定番の資料が並ぶ中で、観覧者に少々意外に映っていたのは、カラスの剥製標本だったようです。

▼ 都市生物の頂点

都市に住んでいる我々が、ほぼ毎日のように遭遇する野生動物と言え、それはカラスに他なりません。あまりにも身近すぎて、カラスを野生動物と認識していない人もいます。人間の出した生ゴミをあさって、おびただしい数が上空をかすめていく・・・都会の生活に慣れ切った姿からは、いわゆる野生をあまり感じ取れない部分もあるのでしょうか。それでも彼らは、遅くとも氷河期が過ぎた頃の約1万年前から日本で暮らしてきた野鳥なのです。我々の身近にいるカラスには2種類あります。嘴が太く本来は森の住人であったハシブトガラス、嘴が細く畑や草地などを好んで生活圏としていたハシボソガラスです。圧倒的多数を占め、都市の問題児となっているのは大方ハシブトガラスを指しています。東京都では、2001年に約36,000羽を

数えたカラスの駆除を、年間1億円超の大規模予算で試みました。2006年には半数に減ったものの、その後は横ばいが続いており、現在でも19,000羽が存在すると言われます。

ハシブトガラスは、もとは熱帯から亜熱帯のジャングルに生息する種類でした。日本では、高山の山頂から低山、村落付近の農耕地、河原、海岸と至る所に一年中姿を現わしますが、基本的には森林性の野鳥なのです。ところが生息条件の悪いと思われる都会のビル街にも生息範囲を広げ、今ではすっかり都市の顔役といった存在になってしまいました。

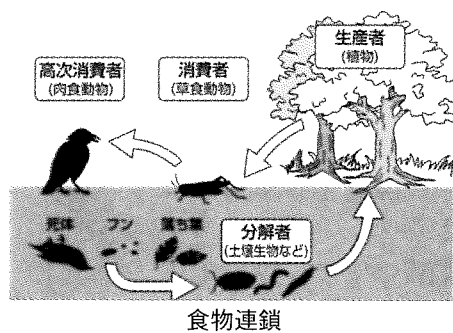
▼ 里山から都市へ

生活基盤が元来、森や草地などの里山環境にあったものが、都市環境下に平然と住みつくようになったのは何故でしょう？ これはカラスに限ったことではありません。日頃何気なく見かけている身近な野鳥たちは、カラス同様に森や林から都市に移行したものばかりなのです。本来の根城であった森林や農家の周辺環境が年々変化したことで、新天地として都市を選択した例といえるでしょう。

逆に変わったのは周辺環境で、カラスは移動せずに留まったという見方もあります。東京で

例えば、江戸時代には武家屋敷や寺社の敷地には緑も豊かで、ツルや最近絶滅宣言されたニホンカワウソなども見られたといえます。現在の山手線の外側に広がる武蔵野台地の大部分は、雑木林と畑が続く農村でした。東京はまさに森林都市とも言うべき環境だったのです。しかし、明治維新、第二次大戦、高度経済成長を経て市街地が広がり始め、環境が一変します。都市化とともに彼らの古巣は消滅していったのです。大半の生き物は移転を余儀なくされたものの、カラスはその場を動きませんでした。元来雑食性で、何でも食べる習性が、黙っていても人間の出す残飯(ゴミ)にありつける特異な環境に適応したのだと思います。

生き物はそれぞれの生態系の中に組み込まれて生きています。生態系は食物連鎖というサイクルを保ちながら成立します。植物を底辺に、昆虫→小動物→鳥→大型動物と、捕食者がピラミッド構造を成し、地中の土壌動物やバクテリアが消化物を分解して植物の養分とする流れです。森ではカラス



『東京 消える生き物 増える生き物』
(川上洋一 著、イブニング 2011年) より転載

はネズミや小鳥を捕える高次消費者だったのですが、都市に移行後は分解者の役割を担いました。都市の高次消費者である人間の食べ残しにありつくからです。1,000万人を越える都民の残飯を分解するには、相応に自身の数も増やさなければならなかったとも言えるでしょう。これがもともとの住処とは全く異なる、都市と言う環境にスライドし、かつ増加の一途を辿った理由とすれば、これも自然なのでしょうか。

▼ 異質な里山環境

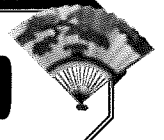
草原性のハシボソガラスよりもハシブトガラスが都市に多いのは、建ち並ぶ構造物が関係しています。震災や空襲で焼け野原となった時期には、ハシボソガラスに都市の盟主の座を一旦譲りましたが、復興後都市化が郊外まで及ぶに

至り、再び逆転した経緯があります。もちろん都市で森林面積や機能が回復したわけではありません。高い所から周囲を見渡せる高木の代わりとなるビル、電柱、歩道橋など、都市開発とともに多様な足場が復活したからです。南アジアに生息する森林性のクマネズミが高層ビル内の繁殖で増えてきたように、山や丘陵で営巣するフシタカの仲間が高い建物の上空を滑空する姿がしばしば目撃されるように、カラスを筆頭に、都市に進出した動物たちは、本来の生息環境に似た自然を都市構造物に見出ししているでしょう。餌が豊富にあり、天敵もほとんどいない都市環境は、カラスにとっては里山以上に快適なのかも知れません。

疑似里山とは言っても、都市環境は所詮人工の空間であり、例えば急増した新築マンションのようなものです。当然様々な入居者を迎え入れることになるのですが、本来の里山から引越して来る住人だけとは限りません。ハクビシンやアライグマなど外国からの入居希望者も続々と受け入れられています。もともと日本のどの場所にも生息していなかった動物ゆえに、都市にしか入り込むことができないからです。食害や糞公害、器物破損等、問題は絶えません。こうした外来種に関する規制もかなり法制化され、これを食い止めるべく努力がされています。但し、受入れ体制(都市化)は整う一方なので限界があり、さらには新種の外来生物が続々と国内に侵入している現状です。府中の浅間山や多摩川のように、人工ではない里山環境が都市にも整備されれば、生き物はそこに集中して人間の居住空間を脅かす度合いは減るようになるのですが、まだまだ打開策は見い出せないままです。ノーベル賞で話題のiPS細胞のように、失われた環境を初期化する特效薬でも見つければいいのです



知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物



⑦ 猿渡盛章

六所宮と神主・猿渡家

府中の街の中心に鎮座する武蔵総社の大國魂神社（六所宮）。その神主家を古くから継いできたのが猿渡家です。猿渡盛章は江戸時代後期の文化文政年間前後の52年間にわたり神主として活躍しました。

盛章の生まれたのは寛政2年（1790）。父・盛房の期待が大きく、早くも7歳で太々神楽、13歳で例大祭に勤仕しました。大國魂神社の例大祭は「くらやみ祭」と呼ばれる伝統ある祭礼で、盛章は後年この祭の整備にも力を尽くしました。また、自らの神社の社誌『新撰総社伝記』『新撰総社伝記考証』を著しました。本書が成った翌年の文政12年（1829）には、そのエッセンスをまとめた『武蔵総社略記』を刊行し、普及にも努めました。

六所宮の祭神と盛章

盛章の特筆される功績の一つは、当時あやふやになっていた大國魂神社の祭神を確定し、六所宮という旧社号の意味をはっきりさせたことです。江戸時代にはオオナムチを主祭神にイザナギ・スサノオなどを祀っていましたが、若き日の盛章は室町時代の長弁著『私案抄』や『神道集』を読み、本来の祭神名を「発見」しました。一之宮・小野神社から六之宮・杉山神社までの六祭神がはっきりし、武蔵国の有力な六つの神社の祭神を合祀した六所宮の古代以来の由緒も判明しました。

国学者としての盛章

盛章の活躍は神社のことばかりではありません。膨大な書物を渉猟し、『神代俚談』『古事記略解』などを著し、古典研究や歌学を中心とする国学者としても知られるようになります。

小山田与清の門下であり、賀茂真淵・村田春海らの江戸派国学と呼ばれるグループに今では括られています。歌人としても活躍し、地域の文化人の中心的な存在でした。『縦の下草』とい



猿渡盛章肖像（複製）

う歌集が遺されています。

その盛章は、36歳になった文政9年（1826）、官位（従五位下近江

守）申請の目的もあって京都方面の旅をしています。まる3か月をかけ、往復のルートを変え、各地の社寺や名所旧跡を隈なく回り、大いに見聞を広めたことでしょう。伊勢では足代弘訓・荒木田久守・本居春庭ら当代を代表する国学者とも面会しています。その旅の詳細な紀行文『山海日記』は考証学の書として、また文学作品としても優れたものです。

時代を超えた思想

時代は文化文政期から幕末へと進み、嘉永6年（1853）には、「太平の世」を覚ますペリーの「黒船」が来航するという事件が起きます。

「開国」の是非を巡って世論は沸き立ちますが、この時63歳になっていた盛章は豊富な知識と経験を活かし、「擬策下案」と題する意見書を幕府寺社奉行に提出しました。

「日本はこれまで外国人を軽蔑してきたが、特に西洋諸国の進歩は著しい。幕府はこれまでの制度に固守すべきではない」「国防は強化すべきだが、諸外国を硬化させるようなかたくな態度を取らず、相手の意をくみながら柔軟な姿勢をとるべきである」「日本は豊かな国だが世界から見れば狭い。外国と通商するようになれば国内の産業を衰退させる。説明を尽くして、通商については認められないことを説得すべきである」。これは現在の話ではありません。今から160年も前に、このような意見を府中から発信した人物がいたということです。（小野一之）

最近の発掘調査

古墳を見ながら発掘体験

西府町二丁目 府中市ふるさと文化財課 西野 善勝



現場と熊野神社古墳が写っている空中写真
武蔵府中熊野神社古墳と発掘現場（白線は掘り込みの範囲）

開館二年目をむかえた「ふるさと府中歴史館」では、夏休み期間に合わせた企画展「ムサシカメ丸君のドキ土器夏休み」を開催しました。展示の中心は2012年度最新出土資料展で、市内の発掘調査についての解説パネルと出土遺物の展示をしました。

この企画展のイベントとして「発掘調査の体験」を開催しました。これは、7月から9月にかけて実施した国史跡武蔵府中熊野神社古墳の西側に隣接する地区の発掘調査のうち、8月6日から10日までを体験してもらうもので、地元の小中学生31人とご家族10人に参加していただきました。

この古墳は、全国でも数少ない上円下方墳という形の古墳で、今から1,350年ほど前に築造されたものと推定されています。

今回の発掘調査は、古墳の周溝を確認する目的で実施したのですが、溝とは別の大規模な掘り込みの跡が発見されました。その広さは、東西幅15m以上、南北幅10m以上で、深さは、深いところで3m近くに達していました。断面のローム層には掘削時の工具痕が残っていましたが、古墳と関連づける遺物は出土しませんでした。

以前、古墳の東側でも類似の穴が発見されていて、どちらも古墳築造用の土を採掘した跡の可能性が考えられますが、まだ断定できるものは出土していません。

「発掘調査の体験」では、この掘り込み跡の発掘をしました。今年の夏は酷暑とも形容されたほど暑い夏でしたが、子供たちは、汗をかきながらも一心不乱に移植ゴテをうごかしていました。遺物に限らず、土の中から何かが出土するたびに、普段味わえない喜びを感じているようでした。



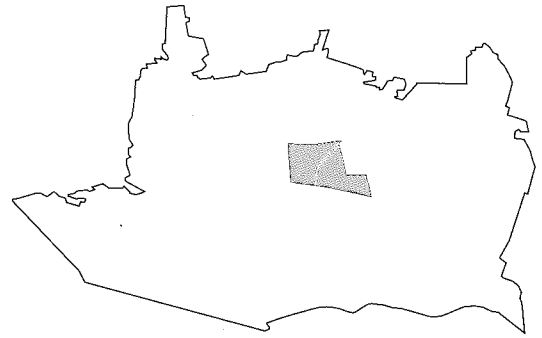
発掘体験の写真

古墳は2005年に国史跡に指定され、2009年には古墳の復元整備が完了しています。現在は、古墳の南約70mに国史跡武蔵府中熊野神社古墳展示館と石室復元展示室がオープンしています。

町にまつわる雑学講座

～府中町 緑町～

府中市は、1954年（昭和29）に、府中町、西府村、多磨村の1町2村が合併して誕生しました。面積29.34平方キロメートルの中には38の町があります。本シリーズでは、その中からいくつかの町に関する雑学を掲載します。



市内38町の中で府中町と隣の緑町は最も遅く名前がつかわれだした所です。

武蔵国府のあった町、府中。甲州街道府中宿の町、府中。府中の府中たる所以の地名として現在の「府中市府中町」が存在する……のでしょうか？ 府中町の位置はちょうど市の中央部を占めてはいますが、国指定史跡「武蔵国府跡」や、大國魂神社や府中宿の街並みが連なった旧甲州街道など歴史的に「府中」の中心と目されて来た地域とは少し離れています。

江戸時代には現在の市域に16の村がありましたが、ハケ（立川段丘崖）上の村々の集落は、人見村を除くと旧甲州街道沿いに集中していました。その北側から小金井や国分寺の集落までの間は畑地や林で、人家はありませんでした。

それが明治時代を迎え、村や町はもう少し大きなまとまりで運営した方が効率的だということで、明治20年代に全国的な町村合併が図られました。かつての16の村々は多磨村・府中駅（のち府中町）・西府村の3つになりました。この時の府中町のエリアは、大雑把に現在の府中市を東西に3等分した真ん中の部分です。

一方それより早く、税制上（地租改正）の必要から土地の区画一筆ごとに番号＝地番がつけられることになりました。その方法は、たいていその町や村の東南の隅を1番として西へ進み、端まできたらその北側を東へ、そしてまたその北側を西へと、いわゆる千鳥方式で行われました。これでいくと隣り合う土地でも番号はかけ離れてしまいますし、桁数も多くなっていました。飛地や分筆で複雑さは増すばかりです。

また時代と共に人口が増加し、それまで人家の無かった地域も宅地化されていきました。す

るとこの地番は住居の番地としても使用されることとなります。それで一番困ったのは郵便屋さんです。警察、消防、行政一般にわたり昭和の中頃には全国で煩雑の極みに達していました。

昭和20年（1945）の敗戦後、もう一回り大きく町村合併が進められ、府中市が誕生します。ほぼ時を同じくして、番地の混乱を整理するため、〇町〇丁目〇番〇号という現行の住居表示に切り替える住居表示法が昭和37年公布されました。府中市でも昭和34年に町名地番の改正が着手され、41年（1966）までかけてようやく「三本木土地区画整理事業地区」を残して終了し、現行の36町名が使われるようになりました。この地区の殆どが後の府中町と緑町で、三本木とはこの地区にあった旧小字のひとつです。

この事業は、昭和31年に国が示した首都圏整備法で都心から15～20km圏を「近郊地帯」とし、幅10kmの緑地帯に設定しようとした事に端を発しています。緑地帯は「開発」が中止され、「発展」が抑止されると考えた府中市等2市14町が反対運動をした結果、法は見直され、50km圏が「近郊整備地帯」として計画的市街地整備と緑地を保全する区域となりました。

府中市はこの法をふまえた都市計画を、戦後急激に市街化が進んでいた三本木地区をモデルケースとして実施することを昭和35年に決定し、土地所有者1,000人近くの協力を得ての換地をしながら、広い道路と公園の整備された地域へと生まれ変わらせたのです。30年余の年月を要して事業が完成したのは平成2年（1990）、2つの新町名が正式に施行されたのは同年2月1日からでした。
(馬場治子)